

日本人にとって道徳はどのようなものとして とらえられているか

～新しい道徳基盤尺度項目の開発を通じた検証～

本田志穂¹・石丸彩香²・宇津宮沙紀³・山根倫也⁴・小田美優¹・坂本和久¹・大江慶寛¹
小林仁美¹・有馬多久充⁵・木寺 碧⁵・小杉考司

Considering the relation between the Haidt's Moral Foundations Theory and
Japanese morality through developing a new scale.

HONDA Shiho, ISHIMARU Sayaka, UTSUNOMIYA Saki, YAMANE Tomonari,
ODA Miyu, SAKAMOTO Kazuhisa, OHE Yoshihiro, KOBAYASHI Hitomi,
ARIMA Takumi, KIDERA Aoi, KOSUGI Koji

(Received September 30, 2016)

Key Words : 道徳基盤理論 倫理観 道徳心理学

問題

はじめに

和辻（1979）によると、倫理とは、人間共同態の存在根拠たる道義を意味するとしている。倫には、「なかま」という意味があり、ここでの「なかま」は単に人を複数的に見ただけではなく、人々間の関係とこの関係によって規定された人々のことである。理とは、「ことわり」であり、「すじ道」である。

こうした道徳や倫理の論理的基盤について分析し、考察する哲学の分野を倫理学という。ブリタニカ国際大百科事典によれば、倫理学はギリシア語のエートス ethos（習俗、性格）に由来し、個人的にはよきエートスの実現、社会的には人間関係を規定する規範、原理の確立を目的とする学問である。この学問は、古代ギリシアの哲学者ソクラテス、プラトン、アリストテレスなどが、善悪の基準を理論的・哲学的に研究したことをはじめとして、古くから現在まで哲学的営みの中心の一つとされてきた。

倫理観の研究は政治学、経済学、心理学など様々な角度からアプローチされてきた。政治学・経済学的観点からは、倫理観には市場型と統治型の大きく2種類に分けられるというJacobs,J.（1992 香西訳 2016）の研究が、進化的観点を取り入れていて大変興味深い。Jacobs（1992）

¹ 山口大学教育学部実践臨床教育課程教育心理学コース

² 名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻心理学講座

³ 神戸大学人間発達観環境学研究科

⁴ 山口大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校臨床心理学専修

⁵ 山口大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース心理学専修

によれば、市場型倫理とは商業活動をするために必要な道徳律であり、統治型倫理とは統治者が統治の体制を維持するために必要な道徳律である。この2つの道徳律はお互いに矛盾し対立する。そのため、「商業に統治者倫理を、統治に商業倫理を適用するというように、目的に合わない道徳の行動様式を採用するだけでシステムの腐敗・解体がもたらされてしまうこともある」(Jacobs,J., 1992 香西訳 2016, P.286) という理論的予測がたつ。

一方、倫理学の歴史では、規範倫理の概念を対比させることで「善は何で決まるのか」という問題が議論されてきた。さらに心理学では、規範倫理が対立した状況で、人間が実際にどのような倫理規範に基づいて道徳判断をしているかについて研究している。道徳判断の基準として、Benthamのような功利的な判断をするのか、Kantのような義務論主義的な判断をするのかについて議論されることが多かった。そのような研究では、「トロッコのジレンマ」や「歩道橋のジレンマ」のような、複数の倫理規範の特徴を対立させるジレンマが考案されており、人間の道徳的判断が、唯一の原則・原理に起因しているとは考えにくいことが示されている(金井、2013)。

道徳基盤理論

社会心理学においては、Haidtが倫理的規範は5つの倫理基盤に帰属するという道徳基盤理論を提唱している(Graham,J., Haidt,J. and Nosek,B.A.,2001,2009,2012)。Haidt (2011,2012)は道徳基盤理論(moral foundation theory)について、道徳的判断が直観的で進化的に獲得された心の特性であると主張している。Haidt (2001)では道徳判断の基準となるのは理性ではなく直観であること、またその判断の基盤が通文化的なものであることを主張しており、具体的には、危害・擁護(Harm)、公正(Fairness)、内集団への忠誠(Ingroup)、権威への敬意(Authority)、純潔・神聖(Purity)の5つの基盤次元を挙げている。

この5つの倫理基盤は、モラル・ファンデーション・クエスチョネア(Moral Foundations Questionnaire、以下MFQ)という尺度によって測定される。尺度は、「0.まったく関係がない」から「5. 極めて関係がある」の6件法である。金井(2013)は複数あるMFQの質問方法のうち、2つを翻訳している。1つは、ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するとき、その項目がどれくらい関係するか答える質問方法と、ある行為にどれくらい同意するかを答える質問方法のものである。

この5つの道徳基盤の道徳的判断における重視のされ方の違いが、政治的態度の違いと関連しているという研究もある(Graham,J., Haidt,J. and Nosek,B.A.,2009)。ここでの政治的態度とは、大きく自由主義と保守主義に二分される。自由主義は、平等や自由を重視し、必要な場合は社会改革を行うべきだとする考え方で、保守主義は、治安や安定性を重視し、権威や伝統を尊重し、曖昧さや不確かさを嫌う考え方である(Jost,J.T., 2006なども参照)。自由主義者は道徳的な判断において、5つの道徳基盤のうち、Harm(対立する概念としてのcare)とFairness(対立する概念としてのreciprocity)の2つの道徳基盤をほかの3つの道徳基盤よりも重視するが、保守主義者は自由主義者に比べて、5つすべての道徳基盤を等しく重視する(Graham,J., Haidt,J., and Nosek,B.A., 2009)。Haidt (2012)は、道徳基盤を「経験に先立って組織化されたもの」であり、様々な文化の下で改定されていく草稿のようなものとして定義し、政治的態度も文化と同様に道徳基盤の重視のされ方を変容する要因の一つとして扱った。

文化的特徴

道徳基盤理論は洋の東西を問わず、一貫した性質であるとされるが、政治的態度が異なる基盤セットを持つとされるように、文化的にもどの基盤セットが重んじられるかの違いがみられ

るだろう。

Nisbett (2004) によると、東洋では一般的に、集団目標や協調的な行動が重視されることが多く、調和的な社会関係を維持することが求められ、それは個人の成功よりも優先される。成功も多くの場合、集団目標を達成することであり、個人の栄光として得るものではないと考えられている。一方で西洋では、個人的な成功が重視されることが多く、他者や集団との関係よりも優先され、他者との関係は目標にとって障害となることもある。

Triandis (2002) は西洋人と東洋人の違いを、集団主義と個人主義の違いとしてとらえた。集団主義は、自分を1つ以上の集団(家族、仕事仲間、一族、国)の一部とみなし、集団においてメンバーの団結を重視する人々と定義している。集団の規範や集団から課された義務に動機づけられ、自分自身の目標よりも集団の目標を重視する。また個人主義は、自分は集団から独立していると見なす人々と定義している。他者の目標よりも自分自身の目標を優先させ、他者と関係をもつ際には、利点・欠点を合理的に判断する。道徳性については、個人主義者は、何が適切なのかを求める傾向にあり、嘘をつくことを契約違反とみなす。集団主義者は、多くのルールを守ることで一定の行動をとり、集団の幸福に価値を置くので、内集団の面子や利益を保つのであれば、嘘は容認される (Triandis, H.C., 2002)。

欧米文化と日本文化には、自己観の違いから論じられることもある。内田 (2006) は文化的自己観について、欧米文化では相互独立的自己感が優勢で、自己を動かす力は個人の内部にあると考えられ、自己の内部にある特性や意図・態度は状況や他者の影響をあまり受けないものとして捉えるという。対して、日本的な文化では相互協調的自己感が優勢で、自己を動かす力は個人の内部だけでなくまわりにも存在すると考えられ、自己の内部にある特性や意図・態度は状況や他者から影響を受けて出来上がっていくものとして捉えられるとされる。

また同じアジア圏内で中国と日本という地理的に近い国であっても、その考え方には大きな違いがみられる。加藤 (2006) によると日本人は恩義の貸借関係に敏感であり、相手に心理的な負担をかけまいと自動詞的な表現を多用するが中国語にこのような発想はない。

日本の文化の独自性

それでは日本独自の文化的特徴とはどのようなものがあるのだろうか。非常に漠然とした問題意識ではあるが、本研究に関係すると思われる領域に絞ってレビューを試みたい。

まず、日本の独自性を宗教的側面から述べる。日鉄技術情報センター (2006) によると、神道は日本固有の自然宗教である。神道という神は無数にあり、自然物や自然現象をも神とし、次第に先祖を祭るようになった。のちに仏教・儒教の影響を受け理論化もされた。ひろ (1997) によると、節分、除夜の鐘、結婚、葬式など、日本における習俗や慣例といったものは、これは神道、これは仏教と、截然と区別できないものが多く、まさに神仏が習合しているのが、日本人の文化であるという。

こうした文化的背景が、日本人の心理にどのように影響しているのだろうか。土居 (2001) は「甘え」と「恥」というキーワードで論じている。それによると、「甘え」は、愛情表出を伴う快い気分であり、時にそのような気分を求める欲求をさし、また感情的依存を意味する。人間関係において相手の好意をあてにして振舞うことである。恥とは、明らかに定められた善行の道標に従えないこと、いろいろの義務の間の均衡をたもち、または起こりうる偶然を予見することができないことである (Benedict, R., 1946)。自分が所属する集団との関係において最も意識され、集団から指弾されることこそ恥すべきことであり不名誉なこととされる (土居, 1968)。

こうした特徴が顕著になる場面について、山本（1983）は、「空気」という身近な言葉を用いて論じている。ここでいう空気とは、地球を取り巻く、色・味・においなどのないすきとおった気体という意味での空気ではなく、あたりの気分や様子、雰囲気などのことをあらわしている。議論などの話し合いの場において、結論を採用する場合に、今までの議論の結果出てきた結論ではなく、その「空気」なるものに我々が支配されることにより、論理的結果としてではなく、「空気」に適合した結論を採択してしまう。このように、日本人はしばしば、この「空気」によって自らの意思決定を拘束されることがある。

本研究の課題

Haidt（2001,2009,2012）は、道徳的判断は直感的な判断であり通文化的なものだと述べている。しかし、政治的態度の違いにおいて、自由主義と保守主義で道徳基盤の重視のされ方が異なっているという。また、Haidt（2012）では6つ目として自由も加え、特に危害・擁護と公正（場合によっては自由も）はどの文化でも存在するかなり普遍的な道徳であると考えられ、内集団への忠誠、権威への敬意、純潔・神聖の集団主義的な道徳は、どちらかという文化的な影響があると考えられていると述べている。こうしたことから、道徳基盤の研究において、文化の影響も考慮する必要があると考えられる。

本研究の目的は大きく分けて三つである。第一に、MFQを翻訳した金井（2013）の尺度について、日本でも道徳基盤理論で述べられている理論モデルと一致した五次元構造が得られるかどうかを検証することである。また、MFQの道徳的判断は通文化的であるとされているが、日本人には馴染みにくい表現も散見される。そこで第二に、道徳的に適切でないと考えられる行動項目からなる、新しい道徳判断尺度を作成することを目的とする。この尺度の因子構造がどのようになるのかを、探索的に明らかにする。第三に、MFQの日本語訳尺度と、本研究における新尺度項目との関係から、新尺度の妥当性を検証するとともに、日本独自の道徳判断次元について考察することである。

方法

筆者を含む心理学を専攻する学部生数名が、道徳基盤理論の5つの次元にそれぞれ対応する、道徳的に不適切だと考えられる行為を書きだした。これらの項目のうち重複するものは省き、また、不適切な表現を書き改めた。続いてこれらの項目を、心理学の専門家を含む十数名で改めて5次元に分類し、各次元に含まれる項目数が均等になるように配慮して70項目からなる新尺度項目候補を用意した。

手続き

調査は、集合調査とWebで回答を求めるインターネット調査の2通りの方法で行われた。

集合調査

対象者；Y大学に通う学生125名（男性67名、女性58名、平均年齢19.44歳、SD1.09）

調査時期；2015年12月3日から2週間

方法；調査対象者の負担を軽減するため、4種類の調査票（以下A票、B票、C票、D票とする）を作成した。それぞれの調査票には項目候補から重複を含めて40項目ずつ割り付けた。質問項目には「1. 全く思わない」から「5. とても強く思う」の5件法で回答を求めた。この40項目に加え、金井（2013）のMFQ尺度16項目で調査票を構成した。なお、A票の回答者は29名、B票は32名、C票は30名、D票は34名だった。

インターネット調査

回答者;男性156名、女性162名、性別回答なし6名からなる324名(10代27名、20代170名、30代62名、40代44名、50代13名、年代回答なし8名)。

調査時期;第1期は2015年12月2日から7日(218名)、第2期は2015年12月8日から15日(106名)。

方法;Googleフォームで調査サイトを作り、SNSを通じて広報し回答者を募った。第1期は、集合調査と同じ構成で4種類の回答ページを用意し、回答者の生まれ月によって各ページに振り分け回答を求めた。第2期は、金井(2013)のMFQ16項目と項目候補すべてに回答を求めた。

分析手続き

以下の分析には、R3.3.0ならびにlavaanパッケージ(0.5-20)、psychパッケージ(1.6.4)を用いる。分析手続きとしては、まず金井(2013)のMFQ16項目に対してCFAを行い、尺度の理論的な妥当性を検証する。次に、項目候補70項目に対してEFAを行い、因子構造を検証する。最後に、項目候補の因子構造とMFQとの関係を二次因子分析によって明らかにする。

結果

金井(2013)尺度の検証

金井(2013)のMFQ尺度16項目(付録1参照)を対象に、理論モデルにそって検証的因子分析(CFA,ロバスト最尤推定法)を行った。その結果、モデル全体の適合度は、CFIが ≥ 0.919 、TLIが ≥ 0.894 、RMSEAが ≤ 0.086 であった。推定値の詳細、因子間相関を図1に示す。

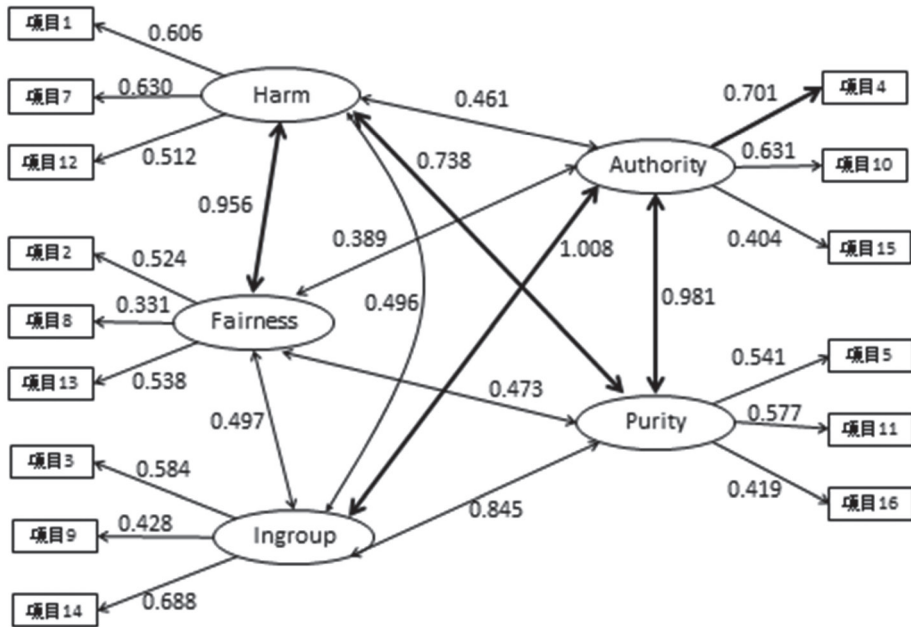


図1 モデルの推定値と因子間相関

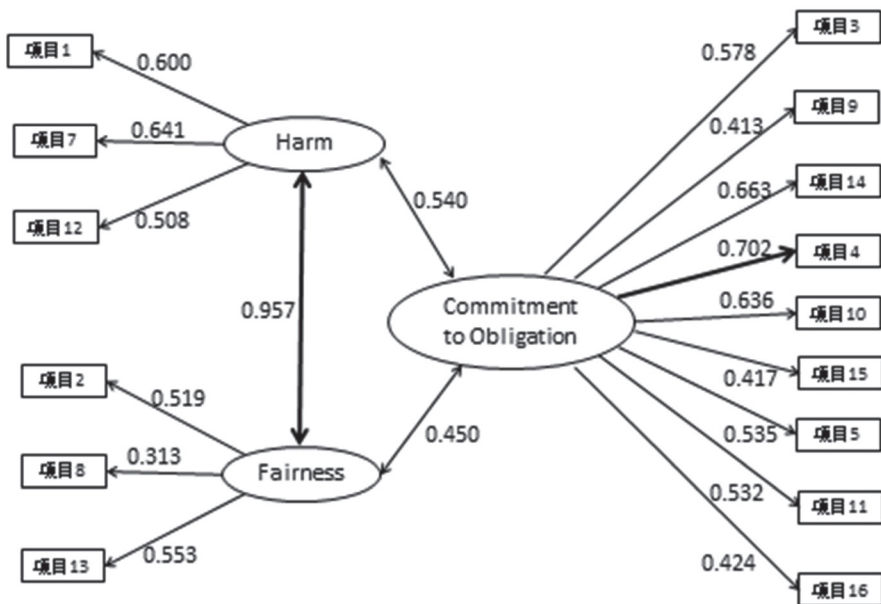


図2 改良モデルの推定値と因子負荷量

図1にあるように、Ingroup因子とAuthority因子の因子間相関係数が0.988、IngroupとPurityの因子間相関係数が0.885と高く、AuthorityとPurityの因子間相関係数の推定値が1.006と理論上不適切な数値を示した。この3つの因子相互の相関が高かったため、この3つの因子に関わる項目をまとめて1つの因子（「義務への拘束commitment to obligation」因子とする。）とした改良モデルを作った。同様に分析したところ、CFIが0.910、TLIが0.892、RMSEAが0.087となり、やや適合度は下がったものの不適解はみられなかった。結果を図2に示す。

新尺度項目候補の分析結果

続いて、本研究で新たに作成した70の項目候補に対して、探索的因子分析を行った。ポリコリック相関行列に対する平行分析を施したところ、適合度指標から3因子構造が適切であると判断された。なお、3因子までの累積寄与率は42%であった。この構造における ω 係数は0.95であり、高い信頼性が示された。そこで3因子を仮定した探索的因子分析（MINRES法、クラスター回転）を行い、共通性が0.3よりも小さかった「試食品を何度も食べる」「人の話を遮る」などの10項目を除き、再度同じ方法で探索的因子分析を行った。結果を表1に示す。

第一因子は、「みんなが笑っている時に泣く（因子負荷量0.730）」「運動会で自分の組を応援しない（0.700）」「上司の椅子に座る（0.690）」などから構成されており、「無遠慮・不謹慎」因子とした。第二因子は、「世界遺産に落書きをする（0.750）」「賽銭箱を壊す（0.720）」「借りたものを返さない（0.690）」などから構成されており、「一般化された他者への配慮」因子とした。第三因子は、「割り当てられた仕事をしない（0.710）」「バイクで屋内を走行する（0.680）」「犬を蹴る（0.680）」などから構成されており、「不特定の他者への攻撃・迷惑・不利益」因子とした。以下、この60項目を新尺度項目とする。

二つの尺度間関係の検証

新尺度候補の3因子それぞれについて因子得点を推定し、また金井（2013）の示す理論的なMFQの5つの因子の項目得点とあわせた8つの因子得点に対して、相互の関係を見るために二次因子分析を行った。これまで同様、平行分析を行ったところ、適合度から3因子構造を仮定することが適切であると判断された。なお、3因子までの累積寄与率は51%であり、信頼性を表す ω 係数は0.73であった。因子分析の結果を表2に示す。

第一因子は、Authority（因子負荷量0.823）、Ingroup（0.813）、Purity（0.618）、「不謹慎・無遠慮」因子（-0.553）から構成されていた（ $\alpha=0.76$ ）。また第二因子は、Fairness（0.894）、Harm（0.476）から（ $\alpha=0.77$ ）、第三因子は、「不特定の他者への攻撃・迷惑・不利益」因子（0.710）、「一般化された他者への配慮」因子（0.483）から構成された（それぞれの α 係数はどちらも0.77であった）。

表1 項目候補に対する因子分析結果

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
みんなが笑っている時に泣く	0.730	-0.050	-0.120	0.500
運動会で自分の組を応援しない	0.700	0.050	0.010	0.510
上司の椅子に座る	0.690	0.010	0.030	0.490
みんなが泣いている時に笑う	0.650	0.130	-0.040	0.440
自分だけ周りと違うものを注文する	0.640	-0.240	0.050	0.450
客より先に主催者が退席する	0.630	0.310	-0.140	0.480
グループの人が賛成する中で反対意見を述べる	0.610	-0.390	0.140	0.520
人からもらったものを売る	0.610	0.210	-0.150	0.400
人形を捨てる	0.600	-0.050	-0.090	0.340
世界遺産に落書きをする	0.020	0.750	0.130	0.630
賽銭箱を壊す	0.120	0.720	0.050	0.560
借りたものを返さない	-0.070	0.610	0.090	0.400
嘘をついて人の評価を下げる	-0.170	0.610	0.180	0.450
スタッフしか立ち入れない場所に入る	0.000	0.600	0.080	0.390
墓石を蹴る	0.320	0.590	0.030	0.500
地蔵に供えられている饅頭を食べる	0.420	0.540	-0.110	0.470
地域で決められているゴミ捨てのルールを守らない	0.010	0.520	0.090	0.310
お酒を無理やり飲ませる	-0.300	0.510	0.180	0.370
割り当てられた仕事をしない	0.030	-0.080	0.710	0.500
バイクで屋内を走行する	0.000	0.210	0.680	0.560
犬を蹴る	-0.050	0.120	0.680	0.490
腐った食べ物を提供する	0.000	0.320	0.590	0.530
行列に割り込む	-0.120	0.370	0.570	0.530
花の咲いている花壇を荒らす	-0.010	0.350	0.550	0.510
電車の混雑時に荷物で座席を一つ占める	-0.030	0.340	0.550	0.500
異性のトイレに入る	0.080	0.020	0.540	0.330
図書館で借りた本を期間内に返却しない	-0.100	0.150	0.530	0.320
負荷量の二乗和	9.588	6.511	6.344	
因子間相関				
第一因子	1.000	0.083	0.258	
第二因子		1.000	0.219	
第三因子			1.000	

表2 項目候補の因子とMFQの因子に対する因子分析結果

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Authority	0.823	-0.139	0.021	0.583
Ingroup	0.813	0.065	0.368	0.708
Purity	0.618	0.052	-0.161	0.487
不謹慎・無遠慮	-0.553	0.227	0.178	0.344
Fairness	-0.014	0.849	0.048	0.811
Harm	0.185	0.476	-0.343	0.413
不特定な他者への攻撃・迷惑・不利益	0.057	0.024	0.710	0.497
一般化された他者への配慮	-0.038	-0.176	0.483	0.241
負荷量の二乗和	2.014	1.071	0.999	
因子間相関				
	第一因子	1.000	0.456	-0.254
	第二因子		1.000	0.238
	第三因子			1.000

考察

本研究の目的は、MFQの結果が日本でも道徳基盤理論で述べられている理論モデルと一致するかどうか確認すると同時に、日本独自の道徳判断に対する項目を作成し、MFQとの関係を検討することであった。

金井（2013）のMFQは、理論通り5因子構造を仮定すると十分な適合度を示したが、一部不適解が生じる結果となった。この不適解を避けるため、改良したモデルを提案するならば、Ingroup, Authority, Purityをあわせて1つの因子とする3因子構造が良いのではないかと考えられる。もっとも、このモデルは適合度としては道徳基盤理論オリジナルのモデル（図1）よりもやや劣る。サンプルサイズを増やしたり、推定方法をベイズ法に変えたりと、異なる対応をすることで不適解を回避することができるかもしれない。とはいえ、提案モデル（図2）も適合度としては十分で、そもそもの因子間相関の高さを踏まえて考えると、日本版としては3因子モデルで考えてもよいかもしれない。

提案モデルは、内集団や権威、純潔さが一つの概念としてまとめられることを示している。もっとも、Graham et al. (2009) にも論じるように、HarmとFairness、そのほかの三つはそもそもまとまりやすい傾向があるもので、これはMFQの弁別的妥当性の低さという問題点が現れたとも考えられる。しかし、より肯定的にとらえ、これを特に日本人サンプルにおける特徴と考えるならば、自らを集団の一部とみなし、和を乱す行為を嫌う集団主義的な特徴が表れているとも考えられるのではないだろうか。すなわち、集団主義では、個人よりも集団を重視し、行動に集団への忠誠と神聖さが求められる。集団の利益となる場合には、多少の必要悪が認められること、また、日本において、宗教は独立したものではなく、文化や風習などと密接に関わっていることから、これらの3つ倫理基盤に強い相関が示されたのではないだろうか。

つぎに、新尺度項目の因子構造について考察する。この尺度項目は、道徳基盤理論の五次元についての概念的定義を踏まえたうえで、身近な事例で例えるとどのような行動が各基盤に抵触するか、という観点から集められた項目であった。

項目候補の因子分析の結果は、基盤理論の枠組みから離れて改めて項目のまとまりとして因子を命名することに努めた。第一因子である「無遠慮・不謹慎」因子は、周囲の雰囲気損なう行為だと考えられる。集団において、メンバー間で行動を統一することが望ましく、それに反した行動をとるメンバーは嫌悪されることが多いという、日本人の「空気」(山本,1983)を尊重する行動が抽出されたといえる。ここでの「空気」は、上司への尊敬や周囲への同調圧力に加え、「人からもらったものを売る」とか「人形を捨てる」といった非直接的侵害をも含まれている。

第二因子は「一般的な他者への配慮」因子と命名したが、ここで示す他者とは、我々が「他者」といわれて想像する人々であるが、そうした「他者」は具体的な実態や個別の顔を持つものではない、あくまでも一般的な「他者」である。この因子に含まれている項目は、一般的に望ましくないとされる行動であると考えられる。この行為は、物理的に被害を受けることはないが、困る人がいるかもしれないのでやってはいけない行為である、と考えられたものである。第一因子と同じく、主体性が明確でないまま対象化し、傷つけることに配慮するのは、個人主義的観点からは見られない独自の感覚であろう。

第三因子は「不特定な他者への攻撃・迷惑・不利益」因子と命名した。ここでの他者とは、行為を行っている場所にいる人々のことであり、第二因子のそれに比べてやや具体性は高く、顔が見える他者である。この尺度項目全体の分析結果から示されることであるが、他人に対する配慮や関心が強く、その対象が内集団のメンバーか不特定多数の第三者かという区別が重要視されていると考えられる。第二因子と異なる点は、その場にいる人が直接的な被害を受ける可能性があると考えられることである。ただし、あくまでも可能性であり、また道義的にも法的にも責任や損害が生じるとは言えない範囲にまで拡張されているところが特徴的である。

最後に、MFQと今回作成した項目候補の関係について述べる。二次因子分析の結果から、同じ因子にまとめられた項目は同種の概念として、他の概念から弁別されていると考えられる。

「無遠慮・不謹慎」因子は、MFQのAuthority, Ingroup, Purityと同様のものを測定していた。「無遠慮・不謹慎」因子は、集団内のメンバーに対する行為のことであり、MFQのこれら保守的な3つの因子、あるいは「義務への拘束」因子との関係がみられるのは、構成概念的に妥当なものであろう。これらは集団への忠誠や神聖さを示すために、メンバー間で統一した行動を求めるといふ、「平等Fairness」というより「同じEquality」であることに根差した判断次元であるといえよう。

新尺度項目の「不特定な他者への攻撃・迷惑・不利益」因子と「一般化された他者への配慮」因子は、MFQのFairness, Harmとは異なる因子として弁別された。作成した尺度は、 ω 係数が十分に高いことから、尺度として内的整合性をもっており、信頼性は十分といえるだろう。しかし妥当性の観点からは、項目が新しいとはいえ、同じ道徳基盤次元に対応するものとして構成されている以上、MFQの因子と一対一対応する因子構造をもつべきであった。この新尺度項目は、信頼性が高く妥当性が低いことから、何か別の構成概念を測定していると考えべきである。

新尺度で取り出された新しい次元からは、日本人は、所属している集団の内外に関わらず、他人に不利益をもたらす行為を嫌い、配慮していることが考えられる。こうした他者への配慮に関係する行為を判断するのは、5つの道徳基盤とは異なる基盤があることを示唆する。

金井(2013)では翻訳のプロセス、バックトランスレーションがなされているかどうかや、交差妥当性についての検証などについての言及はなく、今回用いたMFQがそもそも適切な尺

度であったかどうかということについては改めて問い直される必要がある。また、本研究において新しく構成された尺度項目も、完成した尺度とするにはより多くのサンプルが必要で、より丁寧な信頼性、妥当性の検証を積み重ねなければならないことは論を待たない。とはいえ、道徳基盤理論による倫理基盤とは異なった日本人の判断基準があり得る可能性を示したことは、本研究の果たした少ない貢献の一つといえるだろう。

引用文献

- Benedict,R. (1946) . The chrysanthemum and the sword: patterns of Japanese culture. Mariner Books. (ルース・ベネディクト 長谷川松治 (訳) (2005) . 菊と刀 社会思想社)
- 土居健郎 (1968) . 「甘え」の構造 弘文堂.
- 土居健郎 (2001) . 続「甘え」の構造 弘文堂.
- Graham,J., Haidt,J. & Nosek,B.A. (2009) . Liberals and Conservatives Rely on Different Sets of Moral Foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96 (5) , 1029-1046.
- Haidt, J. (2001) . The Emotional Dog and Its Rational Tail: A Social Intuitionist Approach to Moral Judgement. *Psychological Review* 108, 814 – 834
- Haidt,J. (2006) . *The happiness hypothesis : finding modern truth in ancient wisdom*. Basic Books. (ジョナサン・ハイト 藤澤隆史, 藤沢玲子 (訳) (2011) . しあわせ仮説, 新曜社)
- Haidt,J. (2012) . *The Righteous Mind Why Good People Are Divided by Politics and Religion*. New York: Brockman Inc. (ジョナサン・ハイト 高橋洋 (訳) (2014) . 社会はなぜ左と右にわかれるのか, 紀伊国屋書店)
- ひろさちや (1997). 仏教と神道—どう違うか50のQ&A—, 新潮社.
- Jacobs,J. (1992) . *Systems of Survival: A Dialogue on the Moral Foundations of Commerce and Politics*. New York: Random House Inc. (ジェイン・ジェイコブス 香西 泰 (訳) (2016) . 市場の倫理 統治の倫理 筑摩書房)
- Jost, J.T. (2006) . The end of the end of ideology. *American Psychologist*, 61 (7) , 651-670.
- 金井良太 (2013) . 脳に刻まれたモラルの起源 岩波書店.
- 加藤徹 (2006) . 貝と羊の中国人 新潮社.
- Nisbett,R.E. (2004) . *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently...and Why*. Free Press; Reprint版 (R・E・ニスベット 村本由紀子 (訳) (2014) . 木を見る西洋人 森を見る東洋人, ダイヤモンド社)
- 日鉄情報技術センター (2006). 日本—その姿と心— 学生社
- Triandis, H.C. (1995) . Individualism and collectivism. Westview Press. (H.C.トリアンディス 神山貴弥, 藤原武弘 (訳) (2002) . 個人主義と集団主義,北大路書房)
- 内田由紀子 (2006) . 私の文化を越えて. 金政祐司, 石盛真徳 (編著) . 私から社会へ広がる心理学 (pp.200-221) 北樹出版
- 和辻哲郎 (1979) . 人間の学としての倫理学 岩波全書
- 山本七平 (1983) . 「空気」の研究 文藝春秋

付録1 金井（2013）のMFQ尺度

項目

1. 誰かが精神的に傷ついたかどうか
 2. 一部の人が他とは違う扱いを受けていたかどうか
 3. 行動に自国への愛があったかどうか
 4. 権威に対する敬意が欠落していたかどうか
 5. 純粹さや礼儀正しさの一般的基準に違反していたかどうか
 6. 数学が得意であったかどうか
 7. 弱い人や傷つきやすい人に対する配慮があったかどうか
 8. 不公平な行動をとっていたかどうか
 9. 自分の所属するグループに対する裏切り行為があったかどうか
 10. 社会の伝統的なしきたりに従っていたかどうか
 11. 気持ち悪くなるようなことをしたかどうか
 12. その人が残虐であったかどうか
 13. 誰かの権利がないがしろにされていたかどうか
 14. その人の行動が忠誠心に欠落していたかどうか
 15. ある行動によって、無秩序や混乱が生じたかどうか
 16. 神に許されないような行動をしたかどうか
-